

中国語学習を経た日本人大学生の 中国に対する意識変化

郭 春貴・劉 国彬

(受付 2007年5月9日)

1. はじめに

近年、中国の経済発展が世界の注目を集め、また、海外の中国に対する関心も高まっている。中国語学習ブームはその一つと言えよう。日本においては、若い世代を対象とする高校や大学、社会人や主婦が中心の生涯学習センターなどでも、様々な形で中国語教育が行われている。国際文化フォーラム¹⁾(2001年6月)によると、日本における4年制の大学の8割弱、短期大学の4割強に中国語授業が開設されている。ここから日本人大学生(以下、学生と略)の中国に対する関心の高さが窺われる。

学生の中国に対する関心の最も直接的な形の一つは中国語の授業を受けることである。中には、「中国語が難しい」「中国語がいやになってきた」と感じ、途中で諦める学生がいるにしても、中国語を履修することによって、彼らの中国に対する意識変化が起こったのは間違いないと思われる。

学生の中国への関心を高めること、並びに日中間の友好の重要な架け橋となる若い世代を育てることこそが中国語授業の重要な役割ではないだろうか。そこで、中国語の授業を通して、中国への認識がどのような要素によって影響され、変化していくかについて探求していきたい。

本稿ではまず、中国語を履修した学生を対象にアンケート調査を実施し、その結果から、大学一年生が中国語を履修しようとした時点と、一年間授業を受け、履修を終了した時点の意識を比較し、中国に対する関心の変化

1) 財団法人国際文化フォーラム。http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/ijdata.htm#

及び影響された要素について分析する。

また、本稿は教育の視点に立ち、今後の中国語教育の改善策として提示したい。それ故、本調査はあえて外部（日中間の政治や経済等）の要素、また、学生個人の学力、所属学科、履修形態などの要素も排除し、中国語の授業だけに的を絞った。また、開講した中国語クラス全てを調査するのは限界があるので、劉が教えたクラス（2006年度の大学1年生を中心）に限定した。

2. 調査概要

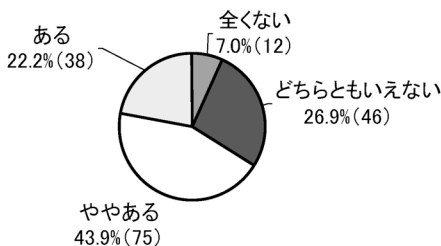
本調査は、2006年度の最終回授業（1月）で、劉が担当した広島修道大学、広島国際大学、福山大学の1年生の中国語履修者（再履修を含む）171名（内訳：中国語学習歴：有8%（14人）、無84%（143人）、無回答8%（14人））を対象に実施した。調査方式は無記名で、有効回収率は100%である。

本調査の目的は、中国語履修者の中国に対する関心の変化を見ることであり、次のように質問項目を設定した。まず、最初に履修しようとした時点での中国に対する関心度と、履修の動機、授業に対する期待など。次に、一年間学習した時点で中国に対する関心の変化の有無、およびその変化の要因について。さらに、中国に対する意識の変化に関係があると予測した授業の満足度も調査した。

3. 中国に対する関心—中国語授業を受ける前

学生が中国語を履修しようとした時点で中国に対する関心度を調べるため、「去年の4月、あなたが中国語の授業を履修しようとしたとき、あなたの中国に対する関心は？」を設問した。この質問に「ある」「ややある」「どちらともいえない」「全くない」という4段階の選択肢を設けた。結果は図1で示したように、「ある」「ややある」は合わせて6割強、「どちらともいえない」26.9%、「全くない」7%という結果が得られた。すなわち、

中国語を学習する直前 6 割の学生は中国に対する関心があることが分かった。逆に、「どちらともいえない」「全くない」と中国への無関心は 4 割弱となっている。



注：括弧内は回答者の実数を示す。

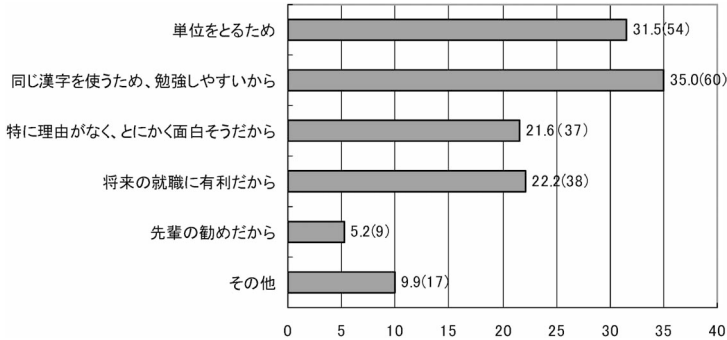
図1 中国語を履修しようとした時点（2006年4月）での中国への関心

次に、この結果を実証するため、学生個人の「中国語学習動機」、「中国語学習への期待」について質問した。

3.1 学習動機から見た中国への関心

中国語の学習動機については、「単位を取るため」、「同じ漢字を使うため、勉強しやすいから」、「将来の就職に有利だから」、「先輩の勧めだから」、「特に理由無し」、「その他」の選択肢を設定した（複数回答可）。図2で示したように、「単位を取るため」「同じ漢字を使うため、勉強しやすいから」はそれぞれ31.5%と35%で最も多い²⁾。

2) ジョーン・ルービン、アイリーン・トンプスン著、西嶋久雄訳（1998）『外国語の効果的な学び方』（大修館書店）23頁では次のように述べている。「外国語学習に対する態度は、言葉や国そのものに特に魅力を感じていなくても外国語を学習する必要がある人で、この場合の外国語に対する態度は実用中心です。すなわち、ある言語を話す人びとや異文化に対する興味以外に、実用的な目的で学習しようということ」。



注：括弧は実数を示す。複数回答可。

図 2 中国語の学習動機

それから、「将来の就職に有利だから」22.2%という答えは中国の経済発展を知っていることと考えられる。「その他」(9.9%)の回答には、「中国の経済が今発展していると聞いたから」、「今の時代、中国だ!!」と思ったから、「中国の経済が今発展していて、今後必要になりそうだったから」、「中国語が面白そうだから」などがあった。両方合わせて、32%ぐらいの学生が中国語の学習は自分の将来にプラスになると考え、すでに中国の状況に多少なりとも関心を持っていることが窺われる。

「特に理由無し」という学習動機が不明確な者が2割いるということは、今日の日本人学生の学習意欲、学習目的が失われていることを反映していると言えるだろう。

鄭麗芸(1997)の研究調査では、「中国文化に対する興味」「中国に旅行したい」という答えもあったが、時代の変化、学生の質が変わったと感じられる。

3.2 中国語学習への期待から見た中国に対する関心

では、学生は中国語を履修する際に、どのような期待を持っているのであろうか。選択肢は、「会話ができるようになりたい」「中国の文化・歴史・

風俗習慣などを知りたい」「中国人の友達を作りたい」「その他」の4つである。結果は図3で示したように、7割強の学生が中国語の学習を通じて、「会話ができるようになりたい」と答えている。

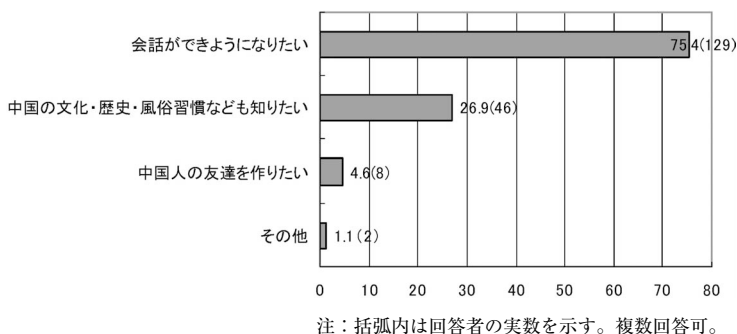
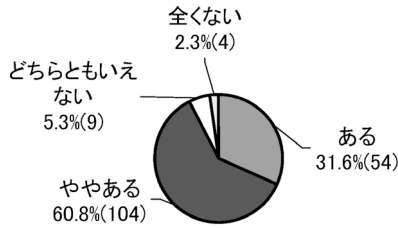


図3 学生の中国語学習の希望

中国に対する関心は中国人と交流したい、コミュニケーションをとりたいという形で現れる。授業に対する希望は、中国語が話せるようになることが彼らにとって、一番であることが分かった。

4. 中国に対する関心—中国語授業を受けた後

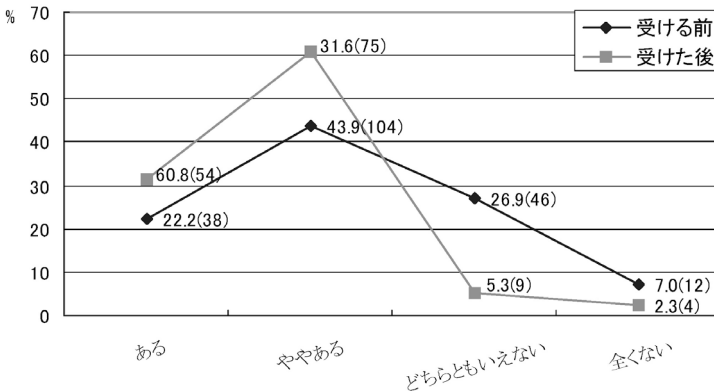
履修時における学生の中国に対する関心を調査した後、次に一年間中国語を学習した時点において中国に対する関心がどのように変化したかを見るため、「中国語の授業を一年間受けて、あなたの中国に対する関心は？」という質問を設けた。選択肢は3とほぼ同じように「ある」「ややある」「どちらともいえない」「全くない」の4つである。結果を見ると、「ある」「ややある」の回答者が92.4%、反対に「どちらともいえない」「全くない」は7.6%である。



注：括弧内は回答者の実数を示す。

図 4 中国語履修終了時の中国に対する関心 (2007年 1 月)

中国語を履修する前より、中国に対する関心度は30%も高まった。それに対して、関心がない者(どちらともいえない・全くないと答えた人)は履修前より26.3%も下がった。中国語の授業を受けることによって中国への関心度が高まったという傾向が現れている (図 5 を参照)。



注：括弧内は回答者の実数を示す。

図 5 中国語の授業を受ける前と受けた後の中国に対する関心の変化

中国に対する関心が高まった理由を明らかにするために、さらにいくつかの質問を設定して分析した。

5. 中国への関心の変化の要因分析

以下、中国への関心が高まった（持てる・持てるようになった）要因と、低くなる（どちらでもない・全くない）の要因、さらに、学生の授業に対する評価から、学生の中国への関心度が変化した要因を分析する。評価に対するアンケートは、学生が期末成績に影響が出るという恐れがあるのではないかと考慮して、アンケートは無記名式とし、実施する前に「このアンケートは研究のためだけであり、成績とは関係がない」と学生に明言した。

5.1 学生の中国への関心が高まった要因

「中国語の授業を一年間受けて、あなたの中国に対する関心は？」の質問に「ある」「ややある」と回答した者にさらに、「ある、ややある理由は？」を「中国語の影響」、「中国語の授業の影響」、「中国語の先生の影響」、「最近の日中関係の影響」、「中国の文化が少し分かったから」という選択肢を設けて質問した。

結果は図6で示したように、「中国語の授業の影響」（46%）が最も多く、次に「中国語の先生の影響」（34.1%）であった。この2つから見ると、中国語授業を担当する教員の影響が大きいと言えるのではないだろうか。

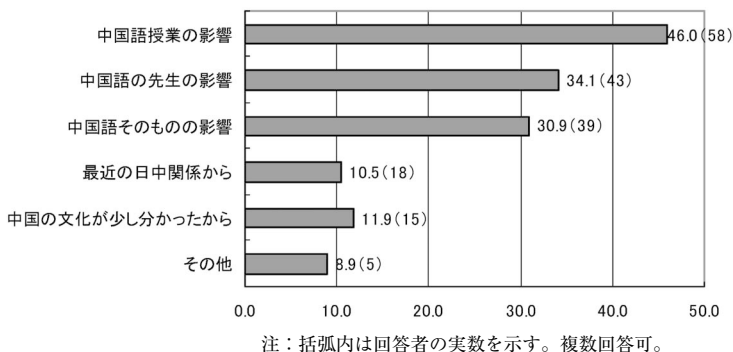


図6 中国語への関心が高まった影響要因

30.9%の学生が「中国語そのものの影響」と答えたのも興味深い。これは教員の影響を受けず、本質的な影響ということになる。また、「最近の日中関係に影響された」と答えた学生は僅か10.5%であった。2005年には中国で反日デモなどが起こったが、学生にとっては政治や国際関係の変化は中国への関心にあまり影響がないということではないか。また、「その他」の自由記述欄の回答を見ると、「中国の歴史に興味を持つようになった」、「中国に興味を持った」、「中国の知り合いと中国語で話せた」という中国への関心が高まった理由も挙げられている。

5.2 学生の中国への関心が低い理由

「中国語の授業を一年間受けて、あなたの中国に対する関心は？」の質問の「どちらともいえない」「全くない」の選択肢を選んだ理由を尋ねた。まず、「どちらともいえない」の回答で、一番多かったのは、図7で示したように「中国語が難しいから」(66.7%)で、次に「最近の日中関係」や「先生の影響」、「授業に対する不満」があげられた。

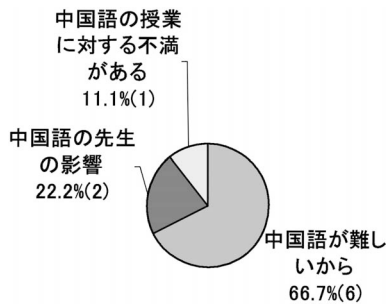


図7 中国語への関心が低い理由

次に、「全く無い」の回答数は4人であったが、その理由は全て「中国語が難しいから」であった。

学生の中国に抱くイメージが現実のものとなるのは中国語で、中国語の

勉強という壁にぶつかると中国語に興味を失い、中国に対する関心も無くなるのが分かる。このことから、学生が中国語を難しいと感じないようにするために、教員はどうすべきか、今後中国語教育の重要な課題と考えられる。教員が学生のレベルに合わせた教授法を考え、学生が興味を持つ授業を工夫すれば、学生の中国への関心を引き寄せることが可能になるであろう。

5.3 学生の授業に対する評価——中国への関心に影響を与える間接的な原因

5.1と5.2でアンケート結果が明らかにしたように、中国への関心が高くなった主な原因は「中国語の授業」であり、変化しなかった原因は「中国語が難しい」であった。実際、両方の原因はともに「授業」と言える。つまり、学生の中国に対する関心度に直接影響しているのは「授業」である。

学生の授業に対する評価からも中国への関心度を窺うことができるのではないか。そこで、本調査の最後に授業評価も求めた。

まず、3.2で見たように、70%強の学生は中国語の学習を通じて、「会話ができるようになりたい」という期待があった。それについて、「あなたの期待は実現したか」という設問に、50%以上が「実現した」「少し実現した」と回答した。次に、「中国語の授業は分かりやすかったか」という設問に、70%以上の学生が「分かりやすかった」「やや分かりやすかった」と回答した。さらに、「中国語の授業について全体評価してください」という設問に、70%以上の学生から「よかった」「ややよかった」と肯定的な評価を得た。

さらに、関心度が高いかどうかを確認するために、「二年生になったら中国語を継続して勉強したいか？」と尋ねた。その結果、無回答（11%）を除き、「したい」（46%）「したくない」（39%）、「分からない」（4%）であった。「したくない」と「無回答」を合わせて、50%の学生が継続して勉強したくないという結果に、教員は反省すべきかもしれない。70%の学生

が「授業がよかった」と評価しているが、中国語や中国への関心に必ずしもつながらないということではないだろうか。

6. 調査結果からの分析

今回は調査数が十分とは言えないが、次の 3 点は今後中国語教育を改善するための一助となり得ると思う。

6.1 中国語の授業は学生の中国への関心に与える影響が大きい

本調査では、中国語を履修する前は、66%の学生が中国に関心があった。そして、履修後関心を持つ学生は増え、92.4%となった。また、中国に対する関心がないという理由も授業と関係がある。「授業が難しい」66.7%、「授業に満足できない」11.1%、「先生の影響」22.2%である。

授業の良し悪しは直接学生の中国に対するイメージに影響する。学生が直接中国文化と接触するのは中国語授業だけかもしれないからである。授業の良し悪しは担当の教員とも関わりがある。語学の教員は自分が学生の前では、ただ“発声機械”に過ぎないと思うかもしれないが、今回の調査では、授業を通した教師と学生の相互接触・交流によって、教育効果が上がるのではないかと考えられる。

6.2 学生の学習動機は興味よりも実利と考えられる

今回の調査で鄭麗芸 (1997) の調査と大きく異なる点は学生の学習動機に「中国や中国文化に興味がある」という回答がなくなったことである。66.5%の学生が「漢字があるから、勉強しやすい」「単位をとりやすい」と答えた。鄭麗芸 (1997) では「中国に興味がある」初級学生は38.7%もいたが、最近の学生は異国文化に対する興味が薄くなってきたのではないだろうか。

6.3 学習の期待も教養よりも実用である

鄭麗芸（1997）の調査でも本調査でも多くの学生は教養や文化より、実用的な会話を期待している。鄭麗芸（1997）の調査では初級学生は33.5%が会話を期待し、26.9%が文化の紹介を望んでいるが、本調査では75.4%の学生が会話を、26.9%が文化の紹介を期待している。多くの大学では中国語が初修外国語であり、授業に会話を多く取り入れる工夫が必要であろう。

7. おわりに

以上、広島修道大学・広島国際大学・福山大学の1年生の中国語履修者を対象にしたアンケートに基づき、中国語履修前と履修後の中国への関心の変化を考察した。

調査対象は一年間通して授業に出席した者に限定したので、不十分な所もあると思われる。今後は、途中で放棄した学生や、学生の個人の属性（例えば、個人の学力、所属学科、各大学のカリキュラムの編成など）を分析した上での調査が必要になるとと思われる。今後研究グループを作って調査することでより一層明確な結果を得ることができると考えられる。

今回の調査で、中国語授業において教員の熱心さと教え方が学生の意識に与える影響が大きいことを改めて考えさせられた。また、学生の中国語教育に対する要求と期待がより実用的な会話であることを大学側は考えるべきであろう。会話授業は30人以上ではとても無理であり、現実とのギャップをどう解決するか、至急解決しなければならないと思われる。

最後に、アンケートに協力してくれた広島修道大学・広島国際大学・福山大学の学生に感謝の意を表したい。

< 参 考 資 料 >

1. 郭春貴（2005）「日本の大学漢語教育問題」『世界漢語教育』第4期。
2. 郭春貴（2000）「日米大学の中国語教育について」『広島修道大論集』第40巻2

号 (人文編)。

3. 財団法人国際文化フォーラム <http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/ijdata.htm#>
4. ジョーン・ルービン, アイリーン・トンプスン著, 西嶋久雄訳 (1998)『外国語の効果的な学び方』大修館書店出版。
5. 鄭麗芸 (1997)「日本の大学漢語教育問題」『世界漢語教育』第 1 期。
6. 日本中国語学会ソフトアカデミズム検討委員会編 (2002)『日本の中国語教育——その現状と課題・2002』東京 好文社出版社。
7. 山口雪江 (2004) 東京都内100大学 (短期大学含む) における中国語教育カリキュラムの現状について』『華蓉論叢』第 3 号。
8. 林炫情・姜姫正 (2007)「韓国語および韓国文化学習者の意識に関する調査研究」『人間環境研究』第 5 巻, 第 2 号, pp 17-31。
9. 劉国彬 (2002)「中国の帰国留学生について」『研究誌季刊中国69』。
10. 廬涛 (2006年 3 月)「日本人学生の中国の見方—間接的経験のありかたをめぐって—」『マネジメント研究』第 6 号。

Summary

日本大学生对中国意识变化

——学习汉语前后的比较——

郭 春贵·劉 国彬

本论文根据 2006 年 1 月刘国彬对 3 所大学 171 名学习过 1 年汉语的大学生所作的调查结果，分析了日本大学生对中国意识变化的原因。

1. 汉语课影响学生对中国的兴趣颇大：调查结果显示，日本学生在选修汉语之前，22.2%对中国有兴趣，43.9%有点儿兴趣，26.9%说不上，7%完全没兴趣。可是上了 1 年的汉语课，31.6%的学生兴趣提高了，60.8%的学生提高了一点儿，5.3%说不上，2.3%兴趣降低了。由此结果我们可以知道汉语课足以影响学生对中国的兴趣。

2. 学生的学习动机重于实利：调查显示，虽然有 66.1%的学生在选修汉语之前对中国有兴趣，可是他们学习汉语的动机并不在于想知道中国文化经济等，66.5%的学生选修汉语的动机只因为汉语有汉字，易学好拿学分。

3. 学生对学习的要求只在于想学一些实用的会话：调查显示，75.4%的学生对学习的要求都是会话，只有 26.9%的学生要求学习中国文化。这也反映学生对学习中国文化的要求不高，学生对中国的意识只停留在汉语这个工具上。

从上述分析，我们了解到目前大部分广岛地区的日本大学生学习汉语的动机虽然重实利，学习要求重实用，但是通过学习汉语，他们对中国的认识与兴趣都有一定的提高。这也足以说明汉语课的好坏将会影响学生对中国的兴趣，而这方面教师的作用是不可忽视的。